

「関係づけ表現」としての「接続語」

氏 家 洋 子

0. 「概念化」が未分化である表現
1. いわゆる接続詞を取上げることについて
2. 逆接表現への注目
3. 「関係づけ表現」の一としての「接続語」
4. 「関係づけ表現」使用における個人性

0. 「概念化」が未分化である表現

先の論考で、まず「考える」ということに基点を置き、その方向から言語表現についても考えていくということを述べた¹⁾。その際、日常的な、「表現」に対し、「話す」「書く」の一方の極を物理性・機械性という点でおさえるなら、他方の極に属する、言わば「考える」と言いかえたいような、表わすに際して苦しみを伴うような部面を「表述」として「表現」から特立させた。

ここに「概念化」の過程の問題を持ってくると、日常的な表現というのは「概念化」が「辞」に対する「詞」としてという普通に考えられるレベルを越えて、少なくとも文のレベルで分化したものと見ることができる。そして、一方、感じ、考えたことを「概念」化の問題に於て未分化に表わしているものをここで特立させねばならない。それは或る過程を含み込み、つまり、未分化に表現しているものである。そして、そこに集中的に或る「考える」を表わした、そのことばは、それに続く文の中で具体的な展開を内容上示すことになる。「感動詞」「接続詞」を「辞」とするのは時

1) 『『考える』とそこにおける言語』『早大語研十周年記念論集』73.3.

枝誠記氏の説くところ²⁾であるが、私の立場からはいわゆる品詞分類に与する必要はない。ここでは「接続語」について見て行くが、「概念化」なる語は特に言語過程説的使用ということではなく、ごく一般的な意味に於て使うことになる。

1. いわゆる接続詞を取上げることについて

接続というものが

急いだら間に合う (仮定条件) (順接)

急いだから間に合った(確定条件) (順接)

急いでも遅刻する (仮定条件) (逆接)

急いだが遅刻した (確定条件) (逆接)

という形で説明され³⁾、多く、これら接続助詞から発達したものとして接続詞というものがある時、両者を含めて接続というものは、上の4つの例に挙げられたように単純明快で、極めて客観的、論理的なものだという感じを人に与える。

この場合、論理的とは、まず、主観・客観をほぼ対立的とみなす一般的考え方において客観に属するような、そういう見方である。

しかし、実際そのように見てよいのであろうか。上の4例は、「対等の接続」に対応するものとして挙げられた「条件の接続」としてのものである。

また、同じく国語学辞典「接続詞」では意味上の分類として、累加的・選択的・順接的・逆接的の4つが挙げられている⁴⁾。

一体、接続詞は‘論理的’なものなのか、ということは、論理的な事柄を表示するのに使われているのか、ということであるが、そのことと、‘論理的’と言い得るならどの程度の、そして、どのような内容の論理を

2) 『日本文法口語篇』1950. 岩波全書.

3) 渡辺実氏「接続」『国語学辞典』.

4) 佐藤喜代治氏執筆.

示しているのか、また、‘論理的’でないと言う方が妥当だとしたら、その原因・理由としてどんなことが考えられるか、というようなことが問題になる。

接続助詞よりも、論理性如何を見ようとする時、接続詞の方が文と文との間の関係を調べるということで、より見易いのではないかと考え、ここでは接続詞を選ぶことによってこの問題を考えていく。このことをもう少し説明するなら、接続助詞に関しては、これは一つの文の中で使われているので、その部分の論理性云々よりも、結局その文で言いたいことが表わされているかどうかが大切な問題となる。それに比べ、接続詞の方は一つの文という単位が終った時、次の文へ続けていく場合に使われるものだから、よりはっきりした意識の中で選ばれると見ることが可能であろうからということである。

文と文とをつなぐ、ということは、必ずしも接続詞が文頭にくるということの意味するわけではない。

私は、しかし、その時心の中では違うことを考えていたのである。というように、文中で使われても、前の文との関係が示されていることは自明のことであり、とどのつまりは、文頭か文中かを区別するか否かは語序の扱いをどう見るかの違いになるう。もし、語序・語順というものに比重をおいて考えるなら、接続詞とされるものもその位置の文頭か文中かで区別することが必要になる。

私は、或る、言いたいことの一つのまとまり(粗い言い方だが)が一つの文で表わされるとするなら、その言いたいことは心の中に或るまとまりとしてあるのであって、それが線索性・継時性という言語の性質によって、語序をもって現われてくる、と大局的には考えるため、文中・文頭を問わず、いわゆる接続詞として一括できると見る立場を取る。

2. 逆接表現への注目

次いで、ここでの対象として、最も‘論理性’が明らかに見て取れるも

のとして、逆接に属するものを取り上げることにする。先に国語学辞典「接続詞」の意味の4分類を挙げたが、この佐藤喜代治氏における「累加」について言うと、「そして」「そして」などはここに属するのであろうが、この語はさまざまの場合に使われ、特に‘論理性’に係わっている、とは言えないものである。「選択」についてもほぼ同様のことが言えようし、また、使用頻度も私の予備調査では低い(注6に示した作品について行なった)。

この二者を除くと、次に「順接」であるが、これは論理性には深く係わっているのだが、たとえば「すると」という語は、同じ形を取りながら順接の範疇からはずれるものがあり、しかもその双方が漱石の作品などでは頻度が比較的高い。

それで、この「すると」という一つの形を取上げて、次にこれを

すると、あの人が犯人ですか?

のようなものなのか、

すると、そこへボールがころがってきた。

のようなものなのかをフルイにかける必要がある、中には文脈によって、相当読み込んででもどちらとも決めかねるものが出て来る。それは言うまでもなくその語源に由来することである。

更に、「だから」「従って」などはかなり明確な意識の下に使われることが予想されるが、事実、特別に問題になるようなものが余りない。明確な意識の下で、ということは必要なことで、そのため、いわゆる接続助詞でなく、いわゆる接続詞の方を選ぶと先に述べたのであるが、「だから」「従って」などが使われる場合の意識というのは、どうも、そもそも順接というものが人間の意識に於て自然のことであるからなのか、少なくともその問題になる論理の箇所では主観・客観で異なるということが少ないようである。異なっても、或る見方をすれば、ないしは表現を補えば、それも妥当だと大方考えることができる。

これは英語の本だ。だから、易しい。

と言う人もいれば、

だから、難しい。

と言う人もいる。しかし、この「易しい」には表現されていないだけで「私にとって」の意が前提として含まれているわけである。

このようなわけで、逆接の場合と比べれば、順接というものの持つ、論理的傾性からみても、さして問題はなさそうである。

また、これは総体的に言えることではないだろうが、順接が、たとえ或る文章というまとまりの中では、部分的であっても、一つの結論という形で出されるのに対し、逆接は、思考の過程にあり、そこにおいて、ある措定に反するものとして出てくる考えを表わす時使われると言えはしないか。一面としては、こうした理由の故に、順接の方が一般性を持ち易く、逆接の方は個人個人による違いをもつ。

こういう言い方は、人間は結論はみな同じになるが、そこへ行く迄のプロセスが違うということのように聞こえる恐れがある。そうではなくて、総体的には、人間の心理の傾性から順接の方は聞き手にもわかり易いが、逆接の方は措定に反するものとして出されるため、そこにさまざまな可能性があるから、聞き手にもすぐに十分納得がいくということが順接より少ないということである。これは実は人間における、「逆接」を使う時の心理が究められればそこから或る結論が引き出せるという方向も考えられるわけである。が、ここではその暁の結論的一致を願いながら、ともかくも言語表現をとっかかりにこうした問題を考えていくことにしたい。

3. 「関係づけ表現」の一としての「接続語」

「とっかかり」という表現を使った内実はこうである。私の基本的立場は、「考える」という側に基軸をおき、ここから言語をみていくというものである。それは、他ならぬ「人間の」言語の本質を探るのが私の課題だからである。ただ、ここで補足をしておくと、この基本的立場を打出す過程で、「感じる」ということを、「考える」のもつ過程性の、出発点に位置づけたのだが、このことが「感じる」を「考える」の影に押しやった形に

なったことを反省して、特に日本語を対象として言語について考えようというこのためか、「感じる」の比重を小さく見られることは不本意で、あくまで「考える」の中に確と含まれていることをここで確認しておきたい。

さて、ここにあっては、なるべく或る語を使う人間の、その思考に即したことばの研究が望まれる。と言うより、先に挙げた基本的立場を取るような者には、言語一般を見ていても、人間の思考の様相の違いが言語表現の違いとして表わされているものが目につくのであって、この視点から見た、言語の体系化の必要を感じる。本稿はその一環を担うものとして、こうした視点から特立すべきとする言語をいかに抽出していくかを展開しようとするものである。

品詞分類というものがあるが、これも、言語に対して、私の基本的立場とは異なるところからのとらえ方である。結果的には重複する部分もあるから接続詞という形での抽出を行なっているが、いわゆる接続詞について、そのように品詞分類した方向から、その内容について研究しようというものではない。ここでは或る一つの「考える」のまとまりを表わしたものととしての文に対し、その次に、また或る考えを表わそうとするに際し、その両者をいかに関係づけているかを表わしたものととして、つまり、言語機能的には接続の役を担っているとみられるが、その内容は今述べたようなものであるということで、「関係づけ表現」という語を使い、その一として、「接続語」を見ていくということにする。

なぜ、この問題を考えようとしているのか。人間の考え方について究めるという究極の目的のためには、もし、考え方がことばの形をとって表わされるなら、逆接の「接続語」をとっかかりに、その前後の関係を見ることによって、その語がどんな「考え方」の顕現として選ばれたかがわかるであろう。

「考え方」というものはいくつかのレベルで考えることができる。それを表わす言語の形として現行の言語学・文法の単位としての単語・文・文章ということをごここでどう係わらせることが妥当であろうか。結論的に

は、単語とされているものにも文相当の思考が込められているものがあるということ⁵⁾を、この単位に即した言い方をする時留意しておかねばならない。そのいくつかの具体例については述べたことがあるが、ここで扱う、「関係表現」中の、「接続語」も単に単語のレベルとしての表現でなく、先行思考に対する関係づけという意識の過程が表現されていると言うべきである。

以下、具体例に即して見ていきたい。

日常生活の中ではほとんど無意識にことばを使うことが多いが、そんな中から、そこにひそんでいた我々の或る考え方、感じ方を発見することがしばしばある。

家族でテレビを見ていた時のことである。ドラマの終る時に主題歌が流れてきた。それが主演の俳優の声であることに気付いて、

あ、これ、Aじゃない!?

と言うと、そばにいた1人が、

そう。いかにも素人の歌い方だ。

と言う。それを聞いて反射的に私の口を衝いて出たのは

でも、まじめに歌っているじゃない?

ということばだった。(73年7月19日)

しかし、その直後、私は自分がどうして「でも」と言ったのかと考えていた。考えてみれば、

素人の歌い方だ

ということと

まじめに歌っている

ということとは抵触するものではない。その意味からは、ここで「でも」の代りに、「だから」とか「やっぱり」という語をもってくることも可能なわけである。

5) 「日本語における表現と意識」日本語教育公開講座第10回 73.7 で述べた。

しかし、

素人の歌い方だ

という感想ないし、その表現の仕方、または、もっと適切には、そういう感想を話し手が持ったということ(また、場合によっては、その話し手自身)に対して、我も同感なりということであつたら私はことさらに何も言わなかったと言うべきだ。なぜなら、その時私に「でも、云々」を言わせたエネルギーは、「素人云々」との発言に対する、言ってみれば反撥のようなものだったからである。

そして、そのことが「でも」と符牒を合わせているわけだ。それに続く「まじめ云々」は、「素人云々」がマイナスの評価を表明していると(感じた)ことに對し、プラスの評価を表わしている。こうした関連の中で「でも」が選ばれているとするなら、「素人云々」と「まじめ云々」が内容的に抵触しないのに「でも」が使われていることに対する奇異というような問題は消失する。

表現された結果として在ることばを話し手の心理から切り離して考察の対象とするのでなく、表現意図から、その結果として在ることばという方向を見、常にその意図を探る形でことばを見る必要があるということになる。

しかし、こうした内省的方法を使うにしても、それはそれだけで成立するものではない。上のような表現意図・意欲のあつた時、私はなぜ「でも」を選んでいたのでかという、言語表現活動に必ずついてまわっているラングの問題をここで切り捨てることは許されない。意図とラングとの係わり合いが問題である。

「でも」によってさし渡された前件と後件について、話し手でも聞き手でもない第三者としての観察者の立場である場合、自分ならその関係づけをどう行ふかを見、それと、そこに表現として在るものとを比べるというやり方をここで考えることができる。この場合は、次いで、自分なら選ぶであろう関係づけ表現と同じであれば問題ないが、違う場合はおかしいと感

じる。その時、ではなぜそこに在る表現ではそうした関係づけ方がなされているのか考える。この時、頼るものはそこに取られている関係表現のラング性であろう。まず、それに拠って、その話し手の感じ方・考え方・意図などを知ることに近付こうとするわけである。

が、場合によっては、想像を逞しうしてもそれが理解できない場合がある。

或るテレビのアフタヌーンショーでのことである。 (73. 9. 6)

A₁ たいへん大人っぽいムードの歌ですが、こういう歌、好きですか?

B はい

A₂ こういう大人っぽいムードが好きですか?

B はい

A₃ ねえ、Cさん、最近子供っぽいムードの人が多いでしょう?

C うーん、でも、とてもすてきですね。

A₄ ええ、こういう大人っぽい人は稀少価値があると思います。

AとCが司会者で、Bは今歌い終わったばかりの若い歌手である。Aはここで4回発言しているので、便宜A₁~A₄とした。A₁-B, A₂-Bと続く会話の流れに続いてA₃の間があったら、当然Aの言おうとすることはA₄に示されたものであり、それを一人で言わないためにCに誘い水をかけたのであろうが、CがそのAの意を測りかねたように、「うーん」とうなり、「すてきだ」と言おうとしたのはいいが、その前に「でも」として、Aの表現との関連づけを行なったのは、傍のAとしても不本意なことだったろう。それでA₄で、A₃の一部重複のような不自然な言い方をして、この話をしめくくっている。私から見ると、A₃はA₄の内容を言う為に言ったとしかはじめから考えられなかったので、Cの「でも」は「うーん」から見ても、よく聞いていなかったのかなどと考えてしまう。

「でも」に続けて「すてき」と評価しているところから見ると、CはA₃をなにかマイナスの評価をしたと感じたように思われる。Cがそのように判断した根拠がどうにもつかめないが、それは一つに私がAと同質の人間であり、Cと異質の人間だからということになるのではないか。少なくとも

も、公共的・社会的場での、そして、対人的な心の持ち方、または、ふるまい方に関しては、そして「白」を強調するために「黒」を持ち出してくる論理の使い方がその上にある。それでも C の判断についてここまで探ることができるのは、C の発言中にある「でも」の存在、そしてその意味によってであり、それを不動のものとみるからに他ならない。この語は、使い方は主観的・個人的であるが、物事の関連づけにおける、一定の感じ方・態度を表明しているものだからである。

4. 「関係づけ表現」使用における個人性

先行する思考のまとまりに対して、特に、逆接の形で後続する思考が関係づけられる場合、そこにはさまざまな可能性がある。と言っても、同一の話し手において先行思考 → 関係づけ表現 → 後続思考という形で続けられていく時、その話し手においては或る決まった方向性というものはあるはずだ。そして、そうした中で、或る関係づけ表現・及びそれに後続するものが選ばれていくという形を取る時、また、別の話し手においては別の思考の展開が別の関係づけ表現・及びそれに後続するものを選ばせるということが起る。

思考の個人性と全く同様に、「関係づけ」という、思考の一部をなすものに関しても、それを表現する語は個人的に選ばれ、使われる。

この主観的・個人的表現ということと、一方でこの語に関して言われる、順接・逆接というようないわゆる客観的基準をもって名付けられた言い方との関係についてはどう見るべきか。接続語の各々について、これは順接、これは逆接ということがほぼ決まっているが、それは言わば客観的な意味の範疇に属することである。そして、それを使えば論理的ということになるのではなく、その使い方自体が個人的・主観的な選択に委ねられているということである。使い方とはつまり、関係のつけ方であるから。

客観的な意味があるということは、その語がラングとしてあるということと通じ合うものであり、また、それは概念化の過程を経ているというこ

とでもある。そうしたものを主体がいかに使いこなすかという二つの側面を、こうした接続語が負っているということになる。このことは、たとえば名詞がラングとしてあり、それを使うことが直接、主観の表示にならないことと対比されるのであって、こうした場合には文全体で初めて言語主体の意図が表明されることになると思います。

関係づけ方においては言語主体の差配を待つしかないが、それでもその主体が選択するものは、その語のもつ意味という制約を担っている。そして、その意味を手がかりに、聞き手は話し手の意図のところへ近付くことができるわけである。

そういうわけだから、接続語が論理を表わしているという言い方は前件と後件との間で、誰の目にも明らかな、納得のいく結びつけ方をしている場合に限られるだろう。この場合の‘論理’なる語の使い方は客観的成立を前提としているが、もっと個人的な論理というものもありうるはずだということはお頭においておきたい。

主観的・個人的ということと客観的・論理的ということが出て来たわけだが、ここで接続語に前者のような使い方が多いとすると、すぐ近い語として‘感情’的というものが思い合わされる。だが、接続語のもつ意味にそれが含まれているということと、使い方としてそれが可能だということとは分けて考えねばならない。

早くしなさい。どうしてあなたはそう遅いの？
だって足が痛いんですもの。

のような「だって」には、客観的な意味の範疇を構成するものとしての意義素の中に個人的感情というものが入っているだろう。こういうものはまず区別しておかねばならない。

「しかし」に比べて、「でも」にもそれに近いものがあるように感じられる。それは両者の(広義の)意味の違いに基づくものでもあり、またそれ故に、ほぼ同一の関係づけ方を示す語でありながらも、どちらを選択するか微妙な差異を与え、そうして使われる結果がまた語性の引離しに役立つ

ているという関係も想像される。

「しかし」の方がより論理的文脈と、それをはっきり意識している中で、または、それをはっきり示そうとする態度において使われるようである。が、我々の生活におけるこの種の語の使われ方からも明らかなように、特に論文などにおける書きことばでは「しかし」を使うし、話しことば、特に女性だったり、私的な場では「でも」が使われる。作家も「でも」を使わない人もいる⁶⁾。単に「しかし」と「でも」とを比べることには意味がない。

いずれにしても、接続語について前件と後件との論理的関係を示すという言い方をすると、それは後件の部分で述べようとするのがすっかり固まっている時点で接続語が選ばれた場合でのことであり、現実の表現(特に発話においては)では、接続語は前件に対する態度の表明ということが存外多いようである。と言うことは、前件を叙述した(対話においては相手の話を聞いた)時点で、その時それに対してもった主観を表わしているということである。それが、後件の中で内容として展開されるわけであるが、こうした意味においては、接続語はいわゆる感動詞と似た働きを担っ

6) 漱石『心』では「けれども」「しかし」が多いが、会話に於ては「しかし」続いて、「けれども」と同程度に「でも」が使われている。男性の使用もある。

鴨外は『キタ・セクスアリス』などでは「しかし」一本で通し、概して接続詞の少ない、簡潔な文が続いている。会話はこの種のものでは「だって」という女性の使用一例だけで、「しかし」が会話に使われていることはない。

『雁』では相変わらず「しかし」が圧倒的に多いが、会話としては「でも」の方が優先しており、男性の使用もある。なお、「それでも」が地・会話両方にある。

芥川では「しかし」、続いて「が」が圧倒的に多い。続いて「けれども」があるが、会話に限ると、この種の語の例は少なく「しかし」(『歯車』)「だが」(『首が落ちた話』)の例がわずか見られ、「が」(『MENSURA ZOILI』)「けれども」(『歯車』)はごくわずかである。「でも」は『毛利先生』に1例見られたのみ。(上記の他に『手紙』『手巾』『猿』『二つの手紙』など現代物を調べての結論である。)

武者小路実篤『愛慾』では「だが」、次いで「しかし」が使われる。これは戯曲であり、全て話しことばになっている。この二者が夫々50例、39例であるが、「でも」は2例であり、女性(それも家庭婦人)の話しことばに「しかし」が頻出することはリアリティを欠くうらみがあると感じた。

ていると言える。

こう考えるに至った具体的な例を挙げよう。

泥棒は(略)密かに忍び入って、奥の部屋にある金品を盗むのです。——急に泥棒の話などを始めて申訳ありません。しかし、泥棒が現金や貴金属を盗むものであるならば、立派な文章を書くというのは、他人の心を盗むことなのです。(「清水幾太郎「私の文章作法」p. 86)

これでは、棒線に続く部分に感情表現の挿入があり、そこで「申訳ない」としたことに對して、「が実はこの話はここで関係があるのだ」という気持で「しかし」が使われていると推測される。「しかし」をはさむ前件と後件とが、この接続語に示される関係にあると見るのは妥当ではなからう。

それを繋ぎとめて、われとわが心に、二度と消えないように刻みつけるのには、どうしても、これを文章として書かねばなりません。それをどう書いたらよいか。しかし、その点は、不十分とは思いますが、今までお話しして来たことですから、それを応用して考えてみて下さい。それよりも、(略) (同上 p.182)

この「しかし」は、自分自身、「それをどう書いたらよいか」と問題提出しておきながら、それに直接答えることをしないということから使われている。これも前件と後件との関係を論理的に示すというよりは、前件に対する主観の直接的表明という感が強い。上の2例を引用した書は口述筆記とのことなので、ことさらに話し言葉的要素が色濃く出たとと言える。

純粋に、書かれたものとしては次のような例が見られる。

ほかの動物なら、まだ胎内にいていい時期に生まれてしまう人間の子どもは、早々と社会の風に当たって育たなければなりません。しかし、人間の成育には、この時期に行なわれる社会との接触が、むしろ不可欠だ、ということは重要です。(大出晃「日本語と論理」p. 31)

何ということなく読みすごしてしまいそうだが、この引用部の中から「しかし」の部分抜き取り、後で何らかのことばを穴埋めしようとしたら、果して「しかし」が入るだろうか。むしろ何もないほうがよさそうである。が、この文を書いた人は、「しかし」を使った部分で確かに「しかし」と思ったに相違ない。「育たなければならない」としたことについて、次に、

「なければならない」という義務としてではなく、それが必要なこと・望まれることなのだということが頭に浮かんでいるわけだから、この対比において「しかし」はどうしても必要だったわけである。

だから、「不可欠だ」というところまでは「しかし」の結び前件と照応し合っている。が、そこまできたとき、もう書き手の頭にはその部分がどんな形ではじめに頭に浮かんだかの意識は薄れ、「不可欠だ」としたことを更に「重要だ」としていくように若干横滑りしている。現代語の文によく見られる、言わば鎖型の構造で、各部分部分はつながり合っているが、全体としての整った形がなくなっているというものだ。この鎖型は古文にも多く、推敲がなされていないものであるが、特に古文では語りという性質からそれが現実には不自然でなかったということが考えられる。

現代語の、書かれた文においてもこのような形が通用しているのは、読む方でもそれで結構理解して読み進めていくことができるからであろう。接続語というのは作られた文全体の中で占める論理性というより、或る叙述した内容に対して、書き手が次に頭に浮かんだことと対比させて、それをどう把握したかの表明となっている。

A・B両チームは実力はほぼ同じだった。しかし、Aチームが勝ったのは結束が固かったからと言えるだろう。(730610 作例)

というような文も、さしてどうということなく読みすぎされるものである。 「しかし」は前文と、後続文中の「Aチームが勝った」の部分のみとが照応したものであり、前文と後続文全体との対応の仕方を論理的に示しているものではない。

以上のように接続語の働く様相をとらえてくるなら、結果としてこの種の語がいわゆる客観的論理から隔たった働きをしていても、客観的論理を表わすというのは神話のようなものであり、現実とは違うのだということがはっきりしたということになる。現実にもこのように働きるのは接続語が一面ラングとしてあるからであり、また、他面、働き方としては個人的に使われ得る、つまり、ちょうど指示代名詞のような機能をもっているか

らということになろう。更にここに文構造の違いがその働きを様々に変わった形で見せるという要素も絡まっていたわけである。

次に、

土井光知の「基礎語」は、いまから四十年ほどまえの労作であり、そこにふくまれているボキャブラリーのなかには、すでにこんにちの日常語として不適切なものがたくさんふくまれている。しかし、あらたな「基礎語」の表をつくる努力が、たぶん、いま必要である。(「加藤秀俊「自己表現」p. 139)

のような例はどうか。個人的とは言っても、それにしてもわかりにくい「しかし」である。「不適切なものが多い」と「新しいものを作る必要がある」とは、逆に、順接の「だから」を以てつながれて然るべきではないか。が、「しかし」の持つ、ラングとしての意味にあくまでもかじりついて考えるなら、前文の前半部にある「労作」ということばである。「労作」として敬意を払い、それでも今の時点では作り直さねばならないとする意識が「しかし」を選ばせたのではないか。その意味では、「しかし」は「労作」と「しかし」に後続する部分とをつなぐ意識の表現化されたものであり、「しかし」の前接部「不適切なものが多い」はむしろ、今の主筋に添えられた付加的なものということになる。

このように考えてくると、書き手がどうして「しかし」を使ったかは読み手の解釈の領域に入るが、書き手が「しかし」を使う意識については不動のものを想定していることになる。それは聞き手、読み手である自分がそれを使用时と同じはずであるから、ほぼ「不動」だというわけである。

ことばを通じての理解には全般的に言えることだが、そこには理解しようとする姿勢がまず必要条件としてあるのであって、単にできあがった形からそれを見るという態度からは上に挙げたような考察は生まれ得ない。

話し手・書き手が「その」とか「あれ」という指示代名詞を使った場合、それが何をさしているかを知るのは、その話し手・書き手にとって「その」「あれ」と言える範囲が必ずあるはずであり、それは聞き手・読み手である自分にはわかっていることである。自分自身にとって、同様に

「その」「あれ」と言える場合というのは不動のものとしてわかっている。そこから、それを既に在る話し手・書き手の場合に移行して考えればよいわけである。その使い方は個人的だが、核となる、ラングとして在る意味からそれをさぐることができる。

73.9.30